

遺品のなかの御宿直物。
国学院大栃木短大

栗原澄子

目的 我が国では、昔はすがだんみを敷いて眠った。着物の片袖を脱ぎ片身を敷いて眠った…などさまざまの説があるが、どのような寝具類を使っていたかを明らかにするため。

方法 眠るとき使用（たとえ考えられる遺品類の実態を調査し、その形態・材料・名称などを明らかにする。

結果 名称については、正倉院の御物・伊勢神宮の古神宝・熊野速玉大社の古神宝・阿須賀神社の古神宝・久能山東照宮の遺品・静岡浅間神社の遺品などの記録によれば、御床・御床簾・御床蓆・御衾・御宿直物・御寝巻・御圍・御宿直衣・御大枕・御枕などがある。材料や製地は、檜・真菰・蘭草・絹綿（真綿）・錦・緞・二階織物・漢織物・文綾・綿珍・文綾子・生絹・茅絹・絹好・麻…などが使用されている。また、これらは表と裏のみのもの、間に真菰や蘭草・絹綿（真綿）の入れられているものなどあり、枕は中に檜を入れ、日本紙を貼って更に錦を貼ったもの、表面の文綾子に刺繍を施したものや貼ったなど、その刺繍方法も時代の技術を色濃く残した仮品がある。形態は、縦長の長方形のもの、夜具のような形態のもの、夜具の脇縫いが無く、左・右のどちらかの片前身丈が非常に長いものなどさまざまである。枕も立方体のもの、横長のもの、円形で横長のものなどがある。

一日のうち近く使用されたと考えられる寝具類であるのに、遺品類は意外に少ない。